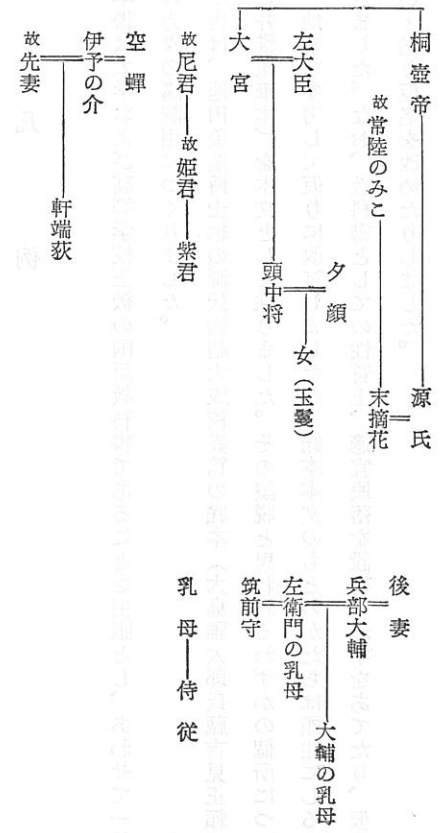


略系図



- 一 夕顔は源氏の通つた女性。源氏が自分の別荘につれだしたところ、はからずも物の怪におそわれて死んでしまった次第が夕顔巻にのべられてゐる。
- 二 源氏物語大成では底本をのぞく青表紙諸本・河内本には「おくれしほどのこち」とある。(以下、かゝげる校異はすべて源氏物語大成に拠る。一々ことわらない。)
- 三 葵上・六条御息所など源氏の通つてゐる女性をさす。
- 四 気取つて思慮深くふるまうという点での、互にはりあつていらつしやる女性方の御様子に対比して。
- 五 夕顔の様子。「うちとけたりし」が「源氏ニトツテハ」おもほえ給ふの主語。
- 六 「おもほえ」は「おもほえ」の転。「え」は助動詞「る」の古形「ゆ」の連用形。自発の意。
- 七 教養の香の高い趣味性・風情をもつてゐることをいう。
- 八 ほとんど。
- 九 めずらしくなすぎて興のないことだ。
- 一〇 たとえようもなくあたたかみの欠けなきまじめさなどが、極端に身の程をわきまえない様子で。

思へども、なほ飽かざりし夕顔の露におくれし心地を、年月経れど思し忘れず、こゝもかしこも、うちとけぬ限の、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに似るものなう、恋しくおもほえ給ふ。いかで、ことごとくしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つゝましき事なからむ、見つけてしがなと、こりずまに思し渡れば、すこしゆゑづきて聞ゆるわたりは、御耳とどめ給はぬ限なきに、さてもやと思し寄るばかりのけはひあるあたりこそ、一行をもほのめかし給ふめるに、靡き聞えずもて離れたるは、さをさあるまじきぞ、いと目馴れたるや。つれなう心強きは、たとしへなう情後るゝまめやかさなど、あまりものの程